

令和4年

季刊

秋季号

Vol.83

亞東



安倍晋三 本会元会長 国葬儀（台湾三代表）2022年9月27日



一般社団法人日本台湾親善協会

Japan-Taiwan Friendship Association

一般社団法人日本台湾親善協会の概要

名称 一般社団法人日本台湾親善協会

(英文名) Japan-Taiwan Friendship Association)

事務所 東京都千代田区平河町二一七—四 砂防会館別館

二階

(必要に応じ支部を設ける)

目的 会員相互の親睦並びに民主主義と自由を信条と

する日本と台湾との相互理解と交流を促進して

日本と台湾との関係強化と発展に寄与する。

事業

① 日本と台湾との政治、経済、文化に関する調査研究及び講演会、研究会の開催並びに研究資料の出版

② 日本と台湾との文化、芸術の相互の紹介

③ 日本と台湾との経済協力の推進に必要な情報の収集及び斡旋

④ 我が国に在住する台湾関係者及び在日留学生に対する交流事業

⑤ その他本会の目的を達成するために必要な事業

日本台湾親善協会の変遷

社団法人日本台湾親善協会は、民主主義と自由経済を信条とするアジア人同志の交流を深める目的で一九四九年、東京に設立された『華南倶楽部』が発祥です。第二次世界大戦後の激動の時代でしたが、会員はひたすらアジアの平和と繁栄を希求し、友愛と信義を基調とした国際関係の樹立に努力を続けて参りました。その結果、この趣旨に賛同する有識者が次第に増加し、活発な活動とともに組織拡大の一途を辿りましたが、一九七二年の日中共同声明は、アジアの政治情勢のみならず、在日アジア人の日常にも大きな変化をもたらしました。

その前年即ち一九七一年、千葉三郎先生(衆議院議員)は、倶楽部を強化発展させる必要を痛感し、岸信介先生、福田赳夫先生、灘尾弘吉先生らと諮り、留日華僑有志の方々が協力され、自ら発起人となり同年五月二九日外務省認可『社団法人亜東親善協会』を設立致しました。

千葉先生の引退後、原文兵衛先生が参議院議長の要職のまま会長に就任され、その後、永年衆議院で活躍された藤尾正行先生が会長を引き継がれ、二一世紀の幕開けとともに玉澤徳一郎先生が会長を務められました。

二〇一二年一月六日、「一般社団法人及び一般財団法人の認定等に関する法律」の施行に伴い一般社団法人としての認可申請が受理され、二〇一三年四月一日より一般社団法人として再スタートいたしました。

日本を含むアジア諸国は、世界の経済に大きな影響を与える程に成長しました。かかる情勢の中、二〇一二年五月、元内閣総理大臣安倍晋三先生を会長にお迎え致しました。同年一月安倍政権が発足、会長の内閣総理大臣復帰に伴い退任され、会長代行の大江康弘参議院議員が就任、二〇一八年五月からは元衆議院副議長の衛藤征士郎先生が会長に就任されました。

日本と台湾との友好交流を発展させ関係の強化を図り、アジアの繁栄と平和に貢献するため二〇一八年九月に名称を「日本台湾親善協会」に変更しました。会員一同、会長のもと、叡智を結集し努力を続けています。

季刊「亜東」令和四年 秋季号・目次

一般社団法人日本台湾親善協会・概要・変遷	二頁
目次・協会役員名簿	三頁
台湾の近況と台日関係	四頁
台北駐日経済文化代表処代表 謝 長廷	十頁
安倍元総理に弔意肅々と	十頁
日本台湾親善協会副会長 並木 正芳	十二頁
新理事就任のごあいさつ	十三頁
日本台湾親善協会理事 柴田 徳光	十三頁
日本台湾親善協会理事 浅見 哲	十四頁
懐かしき台湾の方々	十四頁
一般財団法人栗田美術館理事長 熊沢 正幸	十五頁
日本台湾親善協会理事	十五頁
事務局だより・新入会員のご紹介	十五頁

令和4年5月23日 現在

役員名簿

名誉会長	玉澤徳一郎	張 建国	張 碧華
会長	衛藤征士郎	張 碧華	
副会長	山本順三	張 碧華	
	並木正芳	張 碧華	
専務理事	赤松 則宏		
業務執行理事	藤山 雅康	笹岡 恭亮	
	榎本 有里		
理事 23名	衛藤征士郎	張 建国	張 碧華
	藤赤松 則宏	張 益山	山本伊野
	森森 康郎	榎本 榎本	富田 富田
	岩田 善信	加藤 加藤	岩本 岩本
	熊沢 正幸	浅見 浅見	柴田 柴田
		張 藤山	碧華 有里
		建 雅英	碧華 茂光
		国 康貴	碧華 淑徳
		光 忠哲	碧華 徳
		笹 光忠	碧華 有里
		岡 雅貴	碧華 茂光
		恭 忠哲	碧華 淑徳
		亮 忠哲	碧華 淑徳
			碧華 淑徳
監事	2名	李 八口ルド	鈴木 慶一
事務局		赤松 則宏	李 孔曉

一般社団法人 日本台湾親善協会

台湾の近況と台日関係



台北駐日経済文化代表処
代表謝 長廷

貴協会が設立以来、長年にわたり台湾と日本の友好関係の促進に多大な貢献をされてこられたことに、衷心より敬意と謝意を表します。皆様が関心を寄せている台湾の近況と台日関係について、貴協会令和四年秋号の紙面をお借りして、説明させていただきます。

安倍晋三元総理を追悼

安倍晋三元総理が参議院選挙の応援演説中に銃撃され急逝されてから三か月が過ぎました。安倍元総理のご逝去は日本にとつての損失であるのみならず、国際社会の民主主義陣営、そして台湾にとつても大きな損失であります。

安倍元総理が亡くなった直後の七月一日に、台湾の頼清徳副総統と私は、安倍元総理の自宅に弔問に訪れ、翌日増上寺での葬儀にも参列しました。





蔡英文総統も弔問のため七月一日に台北にある日本台湾交流協会（大使館に相当）を訪れました。そして安倍元総理に宛てた色紙に「台湾の永遠の良き友へ。台日友好と世界の民主主義、自由、人権、平和のために尽くしたあなたの貢献に感謝します」と記しました。

台湾では日本台湾交流協会の台北と高雄の両事務所を設置された弔問記帳の特設会場に、炎天下にもかかわらず計一万五〇〇〇人近くの弔問客が訪れ、メッセージボード（高さ約三メートル、幅約四メートル）に安倍元総理への追悼や感謝の言葉を書き込んでいます。台湾で最も高いビル「台北一〇一」の壁面にも「安倍元首相を追悼」や「台湾の永遠の友達」、「台湾への支持と友情」、「感謝 安倍首相」など安倍元総理を悼み、感謝するメッセージが灯されました。

今年九月二七日に行われた安倍元総理の国葬には台湾から

蘇嘉全・台湾日本関係協会会長、王金平・元立法院長（国会議長）、私が出席し、「指名献花」の対象となりました。また、台湾の李登輝元総統の次女である李安妮氏も参列しました。

また、一〇月一五日午後山口県下関市で行われた安倍元総理の県民葬にも台湾からは立法委員（国会議員）の郭國文氏及び沈發恵氏、林美珠前労働部長（労働相）、台湾好徳公益文化協会の王義郎理事長、そして日本在住の台湾人を含め、約一〇〇人が参列しました。私も東京から参列し、献花しました。

謹んで安倍元総理のご冥福をお祈り申し上げるとともに、台日関係をさらに発展させ、自由と民主主義を守り抜く意志を次世代につなぎたいと存じます。

理念の近い国々と連携

現在、台湾の民主指数の世界のランキングは八位です（ご参考までに中国は一四八位）。台湾の自由度は九四点、日本と同じ世界最高レベルです。台湾は中国により国際的に孤立させられていますが、実際には、台湾人がノービザで行ける国は一二四カ国以上もあります。そして言論の自由は保障され、国のトップである総統（大統領）は国民による直接選挙で選ばれています。

二〇二〇年一月に行われた台湾の総統選挙で、蔡総統が過去最多得票で再選されました。選挙こそが自由と民主主義の根幹であり、台湾の人々は選挙を通じて主権と民主主義を守り抜く

意思を示しました。蔡總統が二期目の就任演説で、中国の「一国二制度」を拒否する考えを改めて表明しました。中国の「一国二制度」は台湾の絶対的多数の民意が断固として反対しており、コンセンサスでもありません。

台湾は中国の脅迫や恫喝に屈することなく、圧力に直面しながらも挑発せず、兩岸で深刻な衝突を引き起こさないようにしてきました。蔡總統は米経済誌『フォーブス』が発表した二〇二一年度版「The World's 100 Most Powerful Women（世界で最もパワフルな女性一〇〇人）」で九位に選ばれた理由の一つは、台湾海峡がここ数十年で最も緊迫する中、自由と民主主義を固く守っていることです。

日本の二〇二二年度「防衛白書」では、「台湾情勢の安定は日本の安全保障、国際社会の安定にとって重要」、「台湾は日本にとって自由、民主主義、基本的人権、法の支配といった基本的価値を共有する極めて重要なパートナーであり、大切な友人」であるとの立場を表明しています。

当時の岸信夫防衛大臣は二〇二二年版「防衛白書」の巻頭で、ロシアのウクライナ侵攻に言及し、「このような力による一方的な現状変更は、国際社会の平和と繁栄を支えてきた普遍的価値に基づく国際秩序の根幹を揺るがすものであり、断じて許容することはできません」、「中国は（中略）、台湾をめぐっては、その統一に武力行使も辞さない構えを見せており、地域の緊張が高まりつつあります」と述べています。

二〇二二年版「防衛白書」では台湾に関する記述が倍増し、台湾海峡における軍事動向や台湾をめぐる国際情勢についても深く分析しています。これは日本政府が、台湾海峡を巡る安全情勢に高い関心を寄せていることを示すものであり、権威主義の対外拡張が国際秩序への挑戦となる中、台湾は日本を含めた理念の近い国々と協力し、台湾海峡の安定、そして地域の平和と安定を促進していきたいと考えています。

台湾海峡の平和と安定の重要性

台湾は小さいながらも、国民一人一人が幸せに生きられる民主国家であることは我々の誇りです。台湾の人々にとって現状維持がもつとも望むことであり、台湾の蔡總統の基本政策も台湾海峡の現状を守ることです。

その現状を変えようとしているのは中国のほうです。近年、中国はサラミ戦略で軍艦や軍機を台湾周辺に侵入させ、長年、暗黙の了解として守ってきた台湾海峡中間線の現状を変更しようとしているのです。

今年八月四日、中国人民解放軍はペロシ米国下院議長の台湾訪問を口実にして台湾を包囲するように軍事演習を行いました。その演習の中で一一発のミサイルを発射し、そのうち五発が日本の排他的経済水域（EEZ）に着弾しました。これはまさに世界平和と国際ルールを破壊する行為です。平和は国際社会の核心的利益そのもので、武力による一方的な現状変更は国際社

会に挑戦する行為で、どこであれ、いつであつても許されることではありません。

台湾が断固として抵抗しているのは、台湾の人々の尊厳と自由のためだけでなく、アジア・インド太平洋地域の安定と平和のためでもあります。台湾がもし中国に武力併合されれば、日本の沖縄、アメリカのグアムなどが危機にさらされるのみならず、全世界の半導体サプライチェーンが寸断され、世界の経済発展に想像もつかないようなマイナス影響がもたらされることとなります。

国際社会の支持・声援

二〇二一年三月二六日、日米外務・防衛担当閣僚会合（二プラス二）が開催され、共同発表に台湾海峡の平和と安定の重要性を強調しました。その後の四月一六日の日米首脳共同声明で、「台湾海峡の平和と安定の重要性を強調するとともに兩岸問題の平和的解決を促す」と明記しました。二〇二一年五月五日に、主要七カ国（G7）外相会合が採択した共同声明に「台湾海峡の平和と安定の重要性を強調し、兩岸問題の平和的解決を促す」と言及しました。二〇二一年六月一三日、イギリスで開かれた先進七カ国首脳会議（G7 サミット）は首脳宣言を採択し、その中で「台湾海峡の平和と安定の重要性」を明記しました。二〇二二年八月四日、G7 外相並びにE.U 上級代表は、「台湾海峡及びその他の地域において、ルールに基づく国際秩序、平

和及び安定を維持するという我々の共通のコミットメントを再確認する」と発表し、中国の実弾射撃演習及び経済的威圧が緊張を高め、地域を不安定にさせる危険があると指摘しました。

われわれはこれらの声明を歓迎し、感謝しています。台湾の政府と国民は台湾の民主主義を守る決意がありますが、軍事大国の武力による現況変更の問題は一国だけで解決できる問題ではありません。問題解決のためには、理念の近い国々が協力し、共に向き合っていかなければなりません。

「台湾有事は、日本有事」

今年八月に中国軍は日本の排他的経済水域（EEZ）にミサイルを打ち込んだことは極めて危険な行為です。まさに「台湾有事は、日本有事」ということが一つの概念ではなく、すでに発生している事実だということが分かるでしょう。そればかりか、中国から見れば、米軍基地のある日本は当事者であり、第三者ではありません。台湾と日本は、いまや名実ともに運命共同体なのです。双方はより一層団結し、災害発生時の「助け合い」の精神を活かし、「相互防衛」の具体的協力を強化しなければなりません。台湾と日本、そしてアメリカが結束して強固な関係を築けば、必ずや軍事拡張者の野心に対する抑止力を高め、台湾海峡および地域の安定と平和をしっかりと守れると確信しています。

台湾、国際社会に貢献できる「善良なパワー」

中国は今も一九七一年一〇月二五日に国連総会で国連における「中国代表権問題」について処理する第二七五八号決議（いわゆる「アルバニア決議」）を曲解し、国連およびその専門機関に圧力をかけ、台湾の参加を排除する法的根拠としています。しかしながら、この決議文は中国の国連代表権を処理しただけにすぎず、中国が台湾の主権を有しているとは一文字も言及されていません。言うまでもなく、中国に国連における台湾の代表権を与えたものでもありません。

中華人民共和国は台湾をこれまで一度も統治したことがありません。民主的手続きを経て選出された政府こそが国際社会において台湾を代表する資格があるのです。

アメリカ国務省のリック・ウォーターズ (Rick Watters) 次官補代理（中国、台湾、モンゴル担当）は二〇二一年一〇月二一日に、米国のシンクタンク「ジャーマン・マーシャル基金（GMF）」主催のオンライン討論会に出席し、台湾の国連体系への参与を訴えると同時に、中国が同決議を曲解し、国連に圧力をかけて台湾の参加を阻止していることを批判しました。

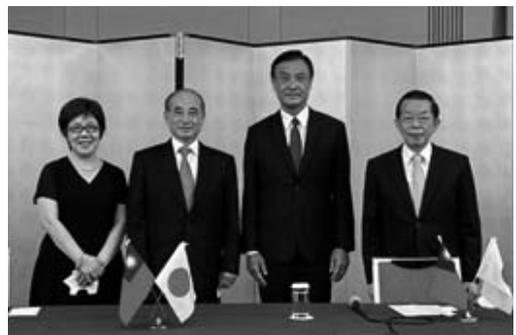
その国連の専門機関の一つで、人間の健康を基本的人権の一つと捉え、その達成を目的とする機関は「世界保健機関（WHO）」です。二、三〇〇万人の人口を有する台湾は、二〇〇九年以降八年連続でWHO総会へオブザーバー参加し、保健衛生分野において国際貢献してきましたが、二〇一七年以降参加が

できていないのが現状です。

コロナ禍以前の二〇一九年に、台日間の人的往来は、双方で七〇〇万人を突破し歴史的記録を更新しました。今年の一〇月中旬からは台日双方の水際対策が緩和されることになりました。人的往来が再開され、台日各分野における交流が盛んになることが予測できます。

国際化の進展に伴い、国境を越える感染症の世界的流行はすべての人に対する脅威であり、こうした脅威に迅速かつ的確に対応していくためには、地球規模での公衆衛生・防疫体制の構築が重要なのです。防疫に国境はありません。関係各国・地域との感染症に関する情報の共有などの国際協力・協調が必要とされ、地理的空白を作るべきではありません。台湾の二、三〇〇万人を排除することがあつてはならないのです。

二〇二一年五月に、先進7カ国（G7）外相会合が「我々は、WHOの諸フォーラム及びWHO総会への台湾の意義ある参加を支持する。国際社会は、新型コロナウイルスのパンデミックへの対処に関する台湾の卓越した貢献を含め、全てのパートナーの経験から恩恵を得られるべきである」との共同声明を出して



おり、日本の参議院は二〇二一年六月一日の本会議で、「W
H〇の台湾への対応に関する決議」を全会一致で可決しました。
二〇二一年五月二四日に、後藤茂之厚生労働大臣がWH〇総会
の政府代表演説の中で、「台湾のように、新型コロナウイルス対
応において公衆衛生上の成果を上げた地域を参考にすべきだ」
と述べました。また、日本の四七都道府県議会のうち、四三の
議会が台湾を支持する意見書を採択しました。日本を始め、理
念の近い国々による台湾支持の表明に、心より感謝します。そ
して、台湾は国際社会への貢献、及び国連システムへの参加に
向けて絶えず努力を続けてまいります。

台湾と日本を結ぶ一〇〇年

台湾と日本、アメリカは自由と民主主義の価値観を共有する
パートナーであり、大切な友人です。特に台湾と日本は外交関
係がありませんが、深い絆に基づく民間関係があります。この
絆は百年前まで遡ることができ、外交関係の断絶は台湾と日本
の民間の友情には影響がないのです。最近、台湾の各地で日本
との絆に関する一〇〇周年記念イベントが行われています。

例をあげますと、成功高校をはじめ、高雄高校、新竹高校な
ど五つの有名な高校は創立百周年の節目を迎えました。また、
台南市の山上花園水道博物館では、一〇月に水道供用一〇〇周
年の記念イベントが開催されました。「台湾水道の父」と呼ば
れた浜野弥四郎先生が一九二〇年に台南市の水道のシステムを

完成させたからです。浜野先生の同僚である八田與一技師も一
九二〇年に嘉南大圳の建設を始め、去年、着工一〇〇年目の
記念式典が開催されました。また、屏東縣にある二峰圳も今年
竣工一〇〇周年を迎え、建設の功労者である鳥居信平先生の銅
像が水路のそばに建立されました。

日本と台湾には国交がありませんが、一〇〇年前のこれらの
「絆」から発展した台日関係は、家族兄弟のようにきわめて緊
密で友好的なものであり、もはや形式的な政治関係を超越して
います。双方は災害や危難に見舞われた時には、必ず互いに協
力し、支援し合っています。これは友好関係の最高の境地であ
ります。

結びに、日本と台湾のより一層の発展と力強い前進を祈念す
るとともに、貴協会の更なるご発展並びに皆様ますますのご
活躍、ご健勝をお祈り申し上げます。





安倍元総理に弔意肅々と

日本台湾親善協会 副会長 並木 正芳



本会元会長でもある安倍晋三元総理大臣の国葬が九月二十七日午後二時より、日本武道館で行われ、衛藤会長はじめ本会役員とともに参列して参りました。

国葬には、海外二一八の国・地域・国際機関からハリス米副大統領、アルバジーニ豪首相、モディ印首相ら国王・大統領・首相などの要人。国内からは秋

篠宮ご夫妻など七人の皇族方や三権の長、衆参の現・元議員、地方首長など四一七〇人、台湾からも王金平元立法院長・蘇嘉全台湾日本関係協会長・謝長廷駐日代表の御三方に代表してご参列いただきました。

葬儀は、安倍昭恵夫人から岸田文雄総理に託され祭壇に祀られた安倍元総理の御霊の見守る中、松野官房長官の開式の辞により始まりました。国歌演奏の後、儀仗隊とともに参列者一同が一分間の黙祷を捧げました。

その後、生前の安倍元総理が東日本大震災の被災地を訪問した時の様子や諸外国を積極的に訪問し要人と会談した様子など思い出のビデオが上映されました。

私も、二〇〇七年六月ドイツで開催のハイリゲンダム・サミットに初めて参加された安倍元総理が、二〇五〇年までに温暖化ガス排出量を半減させるとの「美しい星50（クールアース50）」構想を提案し、首脳文書に盛り込まれた成果を踏まえ、翌二〇〇八年の日本が議長国となるサミットは、自然豊かな北海道洞爺湖で行い、『環境立国・日本』として環境、気候変動問題を主要な課題として取り上げていくと声明され、帰国後八月の内閣改造で「環境大臣政務官」として安倍内閣に登用していただいたことや北朝鮮による拉致問題に熱心に取り組んでいた安倍元総理が私の発言を良い意見だと褒めてくださった事などを思い出していました。



続いて葬儀委員長の岸田総理が追悼の辞を述べ、「自由で開かれたインド太平洋」構想を生み出し、「自由、民主主義、人權と法の支配を重んじる開かれた国際秩序の維持増進に、世界の誰よりも力を尽くした」など数々の実績を述べて同期当選した安倍氏を偲びました。



三権の長の追悼の辞の後、友人代表として菅義偉前総理が、二度目の総理立候補を説得した経緯や総理大臣官邸で共に過ごし、あらゆる苦楽を共にした七年八か月。私は本当に幸せだったと安倍元総理の功績を偲び、「語り合い尽くしし人は先立ちぬ今より後の世をいかにせむ」という山形有朋の歌で気持ちを重ねて締めくくった時には昭恵夫人も涙を溜めておられました。

天皇皇后両陛下、上皇ご夫妻のお使いによる拝礼の後、皇族方の供花、参列者の献花と続き、台湾にも礼節を尽くして指名献花の対象とされ、国葬は午後六時過ぎに終了しました。

また、日本武道館に近い九段坂公園には、一般向けに二台の献花台が設けられました。午前10時からの予定を三〇分早めて開始したにもかかわらず、予定の午後四時を大幅に超え午後七時半ごろまで続き、およそ二万六千人の幅広い年齢層の人々が花を手向け、静かに手を合わせておられたとのこと。



新理事就任のごあいさつ



日本台湾親善協会

理事 柴田 徳光

今年度より理事としてお世話になることになりました、国士館大学の柴田徳光です。この度は理事へのご承認をくださり、誠にありがとうございます。

先ず始めに、この場をお借りしてお書きする形になりますが、昨年の四月に他界した父柴田徳文が皆様方からご厚情を賜ったことを心より厚く御礼を申し上げたく存じます。皆様方からご親切に接していただき、毎年台湾へご同行させていただき、父は幸せであったと確信しております。厚かましいお願いではございませんが、時折父のことを思い出していただけますと幸甚に存じます。

さて、私に関してですが、私は国士館大学の修士課程修了後、ニューヨークのセント・ジョーンズ大学にて近代世界史学の博士号を取得しました。現在は国士館大学政経学部の教員として、教育や研究に従事しております。

私は高校生の頃から台湾に興味を持ってきましたが、ニューヨークでの留学生活で台湾人の友人が多くできたことよって、更に台湾に大きな親しみを感じるようになりました。例えば、

英語の授業のクラスメイトには台湾人とチャイニーズ（中華人民共和国籍の人々）が多くいましたが、文化的にも基本的な考え方的にも近い台湾人たちと親しくなるのは必然のことだったと強く感じております。

それから、友人たちの誘いのお陰で、国連前から中共の領事館前まで、台湾独立運動（国連加盟要求）のデモ行進に参加させていただいたこともありました。あるいは、総統選挙の際に謝長廷候補（現駐日代表）の応援にも駆けつけることができましたが、どれも昨日のことに思ひ出します。楽しい時を過ごせたと共に、心の通じる友人たちという宝物を得られたことは、何よりも運が良かったことと感じております。

残念ながら、私は未だに台湾には訪問したことがなく、父と一緒に台湾へ行く夢も叶わずに終わってしまいました。先ずは台湾訪問の機会が早いうちに訪れるのを心待ちにするばかりです。

最近の仕事に追われているので行えていませんが、趣味は武道やスポーツ（空手道、剣道、野球、サッカーなど）です。将来は武道やスポーツを通じての台湾の方々との交流もしてみたく、何らかの形で日台の架け橋の支えになりたいと存じております。

台湾に関してまだまだ知らないことが多く、そして、まだまだ若輩者の私ですが、いろいろとご教示のほどをどうぞよろしくお願い申し上げます。

新理事就任のごあいさつ



日本台湾親善協会

理事 浅見 哲

岩田善信副会長の御推挙で日本台湾親善協会に参加できることになりました。

山口県徳山（現周南市）生まれの浅見哲（さとし）です。山口県生まれと話す、長州ねってよく言われますが、昔は長州藩の支藩で周防徳山藩と申しまして、長州ではなく周防生まれ育ちです。仕事は岩田先生と同じ税理士をしております。尊敬する人は西郷南洲 山岡鉄舟 児玉源太郎 など、石橋湛山の「和して同ぜず」が座右の銘です。

生まれ故郷の先人の一人に児玉源太郎がおります。私が育った時代は、軍人は評価されませんでした。私が育った時代は、軍人は評価されませんでした。私も明治の初期の時代は侍での政治家が多いですから、軍人として活躍しても文人としても活躍している源太郎は、もともと現代でも評価されてもいいのではないかと思います。そして市の中心に児玉神社があり、縁戚関係者としても身近で、台湾総督をしたことがよく、いい話として伝えられており、台湾に親近感を持つようになっておりました。

最近岩田先生に杖道を教えてもらうことから剣道も稽古し

抜刀試斬りにも凝り始めており、昔の日本の伝統的な教えや武術に限らず、工芸品や作法など、古の日本の良いところを取り戻し学び改めて残すことに少しでも力になればなあと思う今日この頃で居ります。

岩田先生からの一般社団法人 日本台湾親善協会へのお誘いは、こういった最近の心境とともに、児玉源太郎がお役に立つことが出来た台湾との関係を持てるという機会を与えてもらったことは千載一遇のチャンスとばかり、待つてました！と心躍ったというのが正直なところです。杖道に剣道に抜刀に励むのも、日本人の伝統と歴史を取り戻したい気持ちで居るからですが、現在の日本より日本の心が生きているといわれる台湾にお近づきに慣れる機会を頂戴したことは誠にうれしいとともに光栄に感じております。

皆様の邪魔にならないように、少しでもお役に立てば光栄です。よろしくお願い申し上げます。



新理事就任のごあいさつ

懐かしき台湾の方々

一般財団法人 栗田美術館理事長

日本台湾親善協会

理事 熊沢 正幸

麻布青山地域で、私は古美術売買鑑定を生業として七十年になります。戦後この界限は、台湾出身の古美術愛好家が多く住んでおられ、私は恵まれた環境で人生をスタートできました。その方々を追慕し往時を顧みますと、御縁の始まりは、林垂立さんです。私の勤め先の美術店の近くに益子焼の店を出され、二階にコレクションの清朝官窯作品を展示されました。たまにしかお顔を出されない御本人から、他所では見ることができない貴重な作品を手にとることができて、教えて頂きました。「台湾はまだ物騒だから、まだ一度も帰っていない。」と書いておられました。

同じ林姓の熊光さんは、戦前富国生命の社長をおやりになつたそうです。戦後は古美術の趣味と実益を兼ねた悠々たる日々で、たまにお会いする度に「天皇元氣かね。」とお声をかけてくれました。当時名古屋の熊沢某が、「我こそ南朝正統の天皇の系統なるぞ。」と名乗り出て、応援する米軍将校も現れ、世間を騒がした事件から、同姓の私を愛称的に呼ばれたのでした。

六本木坂下今井町に在った張充中さんのお店は、様々な中国古美術品の豊富な店ですが、張さんは絵画の専門家で、私も随分と買って頂きました。そして、台湾のご実家にもお招き戴きました。兄上がお二人おられ、御長兄がロータリーの会長で、御次兄は大企業の社長というビックファミリーのご一家に驚きました。初対面の私を大歓迎して下さいました。そしてその後の数回の訪台時も、変わらぬおもてなしを戴いた事は忘れられません。御長兄様と張充中様のご葬儀には参列させて頂きました。御長兄の時は、李登輝先生も参列されておられました。

中国絵画専門の人で麻布我善坊にお住まいの劉火炎さんは、常に都内の骨董店を廻るのを日課のようにしておられました。短軀で頑強な体でいつも笑顔の劉さんが、突然、我々の前から姿を消してしまいました。数年後の昭和四十一年香港大丸の支配人に抜擢されたのでした。数年後の昭和四十一年香港大丸の広い重役室で見違える風貌と貫禄の劉さんとお会いする機会があり、嬉しかったことを思い出します。

事業を離れた晩年の三十年は世界を廻り、東洋の仏像蒐集に専念された新田棟一さんは、日本、中国、朝鮮の金銅仏の分野では、世界一のコレクターと言われました。私もお世話になりました。

皆さんへの想いは尽きません。

事務局だより

時局講演会の開催

講師 評論家 石平先生

開催日 令和四年十二月十三日(火) 午後五時〇〇分

場所 海運クラブ 二階ホール

〒102-0093

東京都千代田区平河町2-6-4 海運ビル

TEL 〇三―三二六四―一八二五

※新入会員のご紹介

令和四年四月一日〜令和四年九月一日

法人会員

株式会社現代建築研究所 代表取締役 飯田 修一

個人会員

張 銀安

張 君成

児玉金之助

中口 正元

小川 正克



原稿募集

皆様の投稿をお待ちしております。台湾に関するものばかりでなく、身の回りのことなど、ご自由にお寄せ下さい。

紙媒体でもEメールでも事務所宛てにお送りいただければ幸いです。



季刊 **亜東** (アジアの架け橋) 令和四年 秋季号 (No.83)
発行日 : 令和4年11月15日
発行所 : 一般社団法人日本台湾親善協会
発行人 : 衛藤征士郎
所在地 : 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-4 砂防会館別館2階
Tel : 03-3261-6405 Fax : 03-3556-5770
H P : atousinzen@nifty.com
印刷 : 株式会社サンユー



台湾の翼 チャイナエアラインなら、 うまくいく。

日台の架け橋であるチャイナ エアラインは
日本国内主要15空港から台湾へ最多の直行便を運航
豊富なフライトネットワークから、最適なフライトスケジュールをご提案
充実の法人プログラム
フルサービス航空会社ならお仕事でのご利用も安心
あなたのビジネスパートナーにチャイナ エアラインをお選びください



Home page



Face book



Twitter



Instagram